

生き物にとっても 安心・安全な交通システムを

—ノ瀬友博

Tomohiro ICHINOSE

筆者は2009年の夏、対馬を訪れた。目的はいろいろあったが、なんとといっても一番の楽しみはツシヤマネコを一目見ることであった。ツシヤマネコは、イリオモテヤマネコと並び、日本にごくわずかに残るネコ科の哺乳類で、イリオモテヤマネコほど知名度はないかもしれないが、同じ程度かそれ以上に絶滅の危機に瀕しているヤマネコである。環境省のレッドリストでは最も絶滅の危険性が高いカテゴリーに判別されている種である。現在対馬に生息するツシヤマネコは約100頭であると言われている。本来彼らは対馬の生態系の頂点に君臨するので、天敵は存在しない。1970年代以前からその生息数が3分の1にも激減している理由を作っているのは人間である。

では、何が彼らを追い詰めているのか。近年はネコエイズが大きな話題になったり、依然使用され続けているトラバさみによる怪我也彼らを苦しめているが、最も大きな要因の一つとも言えるのは交通事故である。2006年度には7頭ものヤマネコが事故死したという。いわゆる「ロードキル」である。道路網が整備されるとともにヤマネコのロードキルが増加したと言われている。

ロードキルは新しい問題ではなくて、交通機関と交通網の発達とともに顕在化し、その対策を求められるようになった。生き物に対する対処もちろんであるが、当初は自動車など人間側の安全のために問題視されるようになった。大型の哺乳類との衝突は人にとっても甚大な事故につながる。次第に生物に対する配慮が議論されるようになり、哺乳類のみならず、鳥類が自動車に衝突しないような道路の設計に始まり、20世紀の後半には生き物が道路を横断するための専用の橋やトンネルが整備されるようになった。このような生物のための配慮がなされた道路を総称して、「エコロード」と呼んだりしている。生き物の交通安全も配慮される世の中になってきたということである。

しかし、エコロードなら安全かという、人間のために歩道橋などを造るのはわけが違い、思ったように使ってくれないという問題も出てくるし、そもそもコストも大きな壁である。またそのような構造さえあれば解決するわけではないので、より総合的な対策も必要であろう。例えば、先のツシヤマネコに関しては、仔ネコが独り立ちをする秋に事故が多発するという。期間限定で速度制限をするという方法もあるかもしれない。

さて、生き物にとって道路は厄介者であるのは事実であるが、都市においてはその道路を緑化して生き物も棲めるまちづくりをしていくことも考えられる。日本の都市には緑地が少ないと言われるが、道路緑化は生き物の移動経路として貢献する可能性も持ち合わせている。街路樹がありさえすれば生き物が使ってくれるというわけではないことは明らかであるが、ある程度大きな緑地をつなぐように配置され、ボリュームのある高木が植栽されている道路緑化は生物の移動に資することが筆者の研究で明らかになってきている。

人の交通安全から、多くの生き物の交通安全へ。対馬野生生物保護センターで一般公開をされているオスの「福馬(ふくま)」のつぶらな瞳を見ていると、私たちのほうが試されているということに気がついた。

(慶應義塾大学環境情報学部准教授/原稿受理 2009年11月11日)